

温故知新
うと学だより

図文化課文化係 ☎(23)0156

天草四郎と江部村

江戸時代初期の寛永14～15(一六三七～三八)年、島原半島と天草地域を中心とした農民やキリシタン(キリスト教徒)たちが起こした「島原・天草一揆(※1)」。その総大将が10代の少年「天草四郎」だったことはよく知られていますが、四郎が一揆発生の直前まで、家族と共に宇土に住んでいたことを御存知でしょうか。

は偶発的な暴動ではなく、過酷な年貢の取り立てなどを背景に計画的に行われた一揆だったと考えられます。

天草での戦闘は、島子(天草市有明町)付近で始まり、その後本戸(天草市本渡)、富岡(苓北町)へと、一揆勢が優勢で進みました。しかし、幕府側の討伐軍が迫ったために一揆勢は島原に撤退し、廃城となっていた原城(南島原市)に立て籠りました。その後約3か月の籠城戦を経て、寛永15(一六三八)年2月27～28日の幕府軍の総攻撃により一揆は鎮圧されました。原城には約3万7千人の一揆勢が居たとされますが、総攻撃でほぼ全員が殺されました。

島原・天草一揆の概要

寛永14(一六三七)年、島原藩でキリシタンの取り締まりを行う役人が農民たちに殺されたことをきっかけに始まり、対岸の天草地域も含めた大規模な一揆に発展しました。ただし、農民たちの武装蜂起について事前に話し合いが行われていたことから(※2)、これ

原城本丸跡に立つ
天草四郎の像

天草四郎の生い立ちと家族

天草四郎は本名を益田四郎時貞と言います。言い、共に一揆に加わった父・益田甚兵衛は、旧宇土城主・小西行長の元家臣でした。四郎の生まれは定かではありませんが、幼い頃には三日山如来寺(岩古曾町上古閑)で学んでいたと言われ、一揆が発生した当時は、宇土町郊外の江部村(旭町)で、庄屋・次兵衛の

家の脇屋(離れ)に家族と共に住んでいました。

一揆発生後、江部村に居た四郎の家族は捕らえられ、原城に籠城する四郎らに向けて降伏を促す手紙を書くなどの協力をさせられました。特に四郎の母は、幕府軍による総攻撃の後、討ち取られた首の検分をさせられ、陣佐左衛門という人物が討ち取ったひとつの首を見て泣き崩れたことから、幕府側がこれを四郎の首と認定したという逸話が残っています。

四郎が住んだ「江部村」

四郎家族が住んでいたのは宇土の「江部村」ですが、残念ながら家があった正確な場所はわかりません。また、江部という地名が現在に使われていないことも、場所の理解を難しくしています。明治期の絵図などから、およそ図2のとおり江部村の範囲が復元できます。

※1 かつては、弾圧されたキリシタンによる反乱というイメージから「島原の乱」などの呼称が一般的だったが、過酷な年貢に苦しむ農民一揆という性格を重視して、現在はこの名で呼ばれる。

※2 話し合いの舞台となった湯島は現在も「談合島」の別名で知られる。



図2 江部村の位置と範囲

図1 天草四郎とその親族

※カタカナ表記はキリスト教の洗礼名

